

# 遙かなる風雪

15

## 実録・柴田音吉洋服店

### 鮮烈な個性——真夏の太陽のように

2代目柴田音吉を語るとすれば、その生彩ある人物像にまず焦点をあてねばなるまい。ひとことでいえば「陽性」である。

初代音吉も陽性である。素朴で、天衣無縫、陽気な創立者であった。

2代目音吉の陽気さは、その鮮烈な個性を軸としている。彼はめくるめく真夏の太陽のような印象を周りに投げかけ、そして若くして燃えつきた鬼才であった。

ひとはその個性について、用うる限りの形容をもってしてなお、語りつくせぬとため息をつく。

初代音吉の創り上げた地盤を、事業家として飛躍的に拡張したその「建前」よりも、彼に接した人びとはむしろその「人物像」を愛惜し、語りつくすのだ。

× ×  
その憎めない「ぼんぼん」ぶりは、時におかしく、そして時に驚嘆させずにはおかない。感情の起伏が激しく、それは強烈で幼な子のようにさえあった。喜ぶときは手を打って喜び、悲しいときは構わず泣いた。そして怒るとき、このときほど彼の面目が躍如

としたときはなかった。あるとき、例によって店内でカミナリが落ちた。あたりをはらう大音声である。「このバカモノッ」。

叱られた店の者が首をちぢめているところへあたふたと隣の時計屋のあるじがやってきた。

「申し訳ありません、何かウチの若い者がそそをしましたか」と頭を下げる。あまりの大声に、時計屋ではてっきりウチが怒られたに違いないと思いこんだらしい。

店でなにか手落ちがある。ドナられるのはいつも傍にいる者だ。担当者呼んで……などという手間のかかることはしない。他人の手落ちで怒られた者も、しかし馴れていて、そこは一向頓着しない。頓着させないものが、彼にはあったからだ。

怒る。しかしすぐそのあとでフトコロから5円出し、何かうまいもの買ってこい、などという。怒りが激しければ激しいほど、後での補償も大きい。自己所罰、罪障感、人間の平衡感覚として当然。

従業員もその辺のところをよく心得ていたし、音吉自身もわかっていて、暗黙の理解



2代目音吉（昭和初年）

である。  
× ×  
現石垣相談役はなかでも最もよく怒られ、かつ彼に愛されたひとりである。

きかぬ気の石垣青年は店を辞めるとタンカを切って飛び出すこと5回。そのたびに連れ帰られた武勇伝をもつ。

あるとき、例によってドナられ、もう絶対に帰らぬ、テコでも動かぬと自宅にろう城した。怒ってしまえばあとはただもう心配で仕方のない音吉は手をかえ品をかえて店に戻れと使いを寄越す。

さんざんじらしてからやっと店に顔を出した石垣青年を見て、音吉は手の舞い足の踏むところを知らない。「ワァ石垣が帰った、帰った」と手を打って喜んでいる。石垣青年はまだふくれている。「帰れといわれたから一旦は帰りました。しかし辞めさせてもらいます」。

トタンに「バカモノッ」と再びもとのモクアミ。しかし一呼吸あって後の2人、目を見合せてニンマリという筋書になる。いま想像するにこの主従、そうとうに芝居がかったようである。

(つづく) 岡和子記者

本然としたフランステクス留学中の2代目音吉の貼った織物見

